C－8　日本住宅原型は原日本人の一元の伝統と，八尋殿八十坰手の宮の二型を認めるべきことの立説立証

山陽女子短大　　加藤　　泰

1.　拙著「住居学ノート」第3編記の日本住宅原型に北方系，南方系を立てる説否定の再確認その他。

2.　拙古代尺説につき，主要法定尺度唐小尺8.15寸，唐大尺9.78寸とメソポタミア，ダンガン表a種のlémpan 8.1675寸（15指），9.801尺地割単位を比べる時，又両者の比と享保尺1.002折衷尺1.000（度量衡検定所天野清氏実測値）の比の一致により，日支主要尺度は原来ダンガン表のものが伝ったと言える。古代尺値として6.534寸のが伝っている。考古学でも銅鐸問題明らかとなり，金属文化伝来もB.C. 4～5世紀の自分等説に合って来た。記紀文献にこれ等の方法が使える。

3.　所謂「アイヌ人の住宅」のKetunniも原日本人住宅の一元の型の内である。（金田一博士発表参照）八尋殿が恐らく縄紋弥生式に通じ竪穴小屋標準形式で，蒙古の「幾尋の包」又興安嶺を越して固定蒙古包となるものと通じる（伊東博士の天地根元宮造にも通じよう）東屋竪穴と真屋高床が北，南二系となる筈がないことが再確認出来よう。無論古代尺説適用が正しい。○坰手cubit単位説で差支なく，日支主要尺度の共通性から，日支に共通田字平面型（爾雅の奥，屋漏，宦，窔と出雲大社原型住宅型）が民家の京間八畳四間取即八十坰手の宮（天日隅宮）の一致も当然である。これが日支の金属文化の住宅基本型である。（大熊博士「満洲の住宅」参照）十拳剣も同立場で古代尺説から解し得る。6.5尺柱間は後世に発生したものではない。即民家の田字型は間仕切の有無に関せず，一元の住宅室伝統の金属文化時の基本型である。